な効果をもたらすかもしれない。

アメリカは民族のモザイク国家であると言われる。実際，出身民族系ごとにはっきりしたコミュニティーができている。民族習慣には深い背景があり，自分たちの生活を守ってくれるものでもあるから，習慣を捨てたり異民族が錯綜した環境の中で恒常的に付き合ってゆくことはストレスも多いからだろう。しかし，異なった民族同志がお互いを理解してうまくやってゆくということは，主張と交渉の積み重ねであると言ってよく，とにかく骨の折れる作業である。それが国の意識として一つにまでまとまって行くのは驚きだが，フロンティア精神を持った人々の集まりだからこそできるのかもしれない。世代が進むごとに，ゆっくりとアメリカ民族と言い表わせるものができつつあるのだろう。しかし，今は言ってみればインターインディビジュアルな状況である。個が大切であり，主張できる自分が有る事が必須である。それは，幼少の時からしっかりと訓練される。そのかわりに沈黙は最悪の状態であり，常にしゃべりつづけていなくてはならない。

ひるがえって，日本では若者のモラトリアム傾向が指摘されて久しい。なかなか自分を主張できないのである。けれども，私はそれでも心配してはいない。

佐賀県の唐津市に西岡小十さんという78歳になる陶芸家がおられる。戦後，古い唐津焼の陶片に接する機会を重ねるうち，その美に気付いた。57歳にして古唐津復元を決意し，登り窯を築いて努力され，小さな陶片だけを頼りにご子息と共に幾つもの技法を再現した。本歌を凌ぐ作品は驚きをもって迎えられている。そして，その成果を秘すこと無く，求めに応じ惜しみなく教え語る。今，まさに唐津焼の研究所である。陶芸を生業とする人々への有形無形の影響は計りしれないという。「物の価値がわかるようになった時，初めて自分の仕事が決まった。」と静かにおっしゃる言葉が重い。

（水産学部助教授）

私の日本人論　《第7回》

留学生との触れあいの中で

ARIYOSHI TOSHIHIKO
有吉　敏彦

家族と一緒に外国で暮すときに問題となることは，その国の言葉と住居であることは言うまでもない。食は知恵を働かせば何とかなるものである。外国で生活するとなると誰でも多少ともその国の言葉を学んでくるであろう。ところが，日本に来る留学生の中には全く日本語を喋れないし理解しないものもいる。その気持は理解できないこともない。善意に解釈すれば先進国の一員であり，世界中に日本製品が出廻っている中で，英語が喋れ理解できればそれで十分と思ってのことであろう。しかし家族ともどもの自分のドイツ留学のときを考えてみれば，世界の共通語といわれる英語だけで，食べること，着ること，住むこと日常生活に関するあらゆる面で，接触する大多数の人々と意志の疎通がうまくできるはずもない。ましてや日本の物価は驚く程高い。家も狭くプライバシーさえも守れないのが普通であろう。金銭的にも余裕のない留学生であれば家族を抱えて強いストレスと不満が生ずることは当然かもしれない。特に留学生とよく接触する人の中に，人の心の痛みが判らぬ者がいれば尚更のことで反日感情さえも抱きかねない。

（私の家族と留学生）

では解決策はあるのかと問いかけられれば頭を抱えざるをえない。しかし隣国では縁もゆかりもない子供達を50年も育ててくれた人達もいる。要はおおらかな愛，やさしさであろうか。

些細なことかもしれないが，ホームビジット・ホームスティも相互理解の一助であり，留学生自身による自国紹介，自国語講座の開催や，地域住民や団体による地方への招待，村落生活での触れあい体験も，地道ではあるが留学生支援である。長崎クンチや精霊流しも伝統的日本文化の教育の場であり，わが国の自然の姿である。宗教や社会制度，人種が違う留学生だからこそ多様な価値感があり個性がある。

価値感の違い個性の多様性があっても，食事会の食事当番が，カレー，シチュー，おでんなど食事の献立を考えるとき以外は，「ヨソの国の人」として考えたことがないという研究室の若い諸君の自然体に接したとき，私は心が安まる気がする。

（外国人留学生指導センター長・薬学部教授）